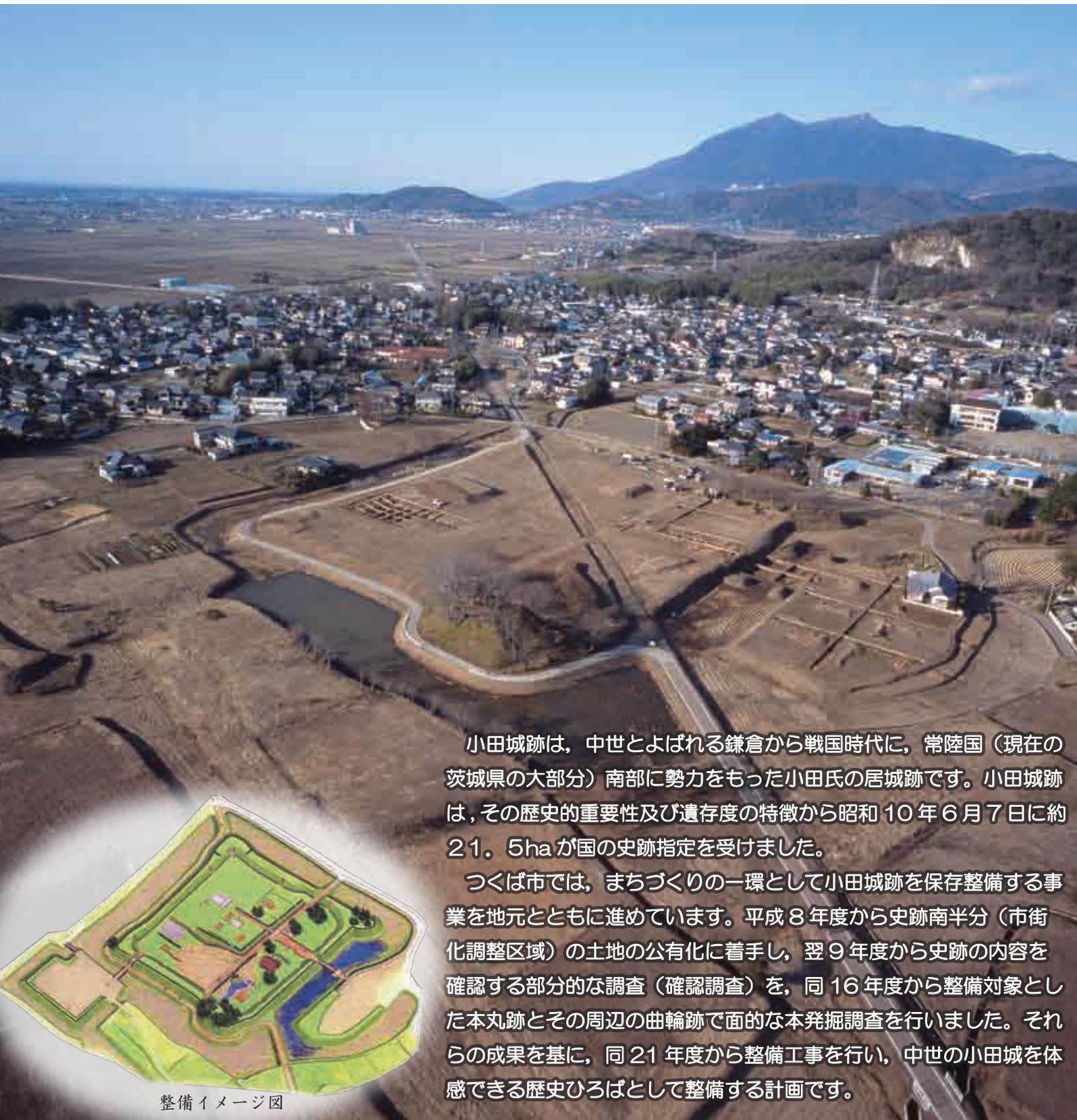


国指定史跡

小田城跡



小田城跡は、中世とよばれる鎌倉から戦国時代に、常陸国（現在の茨城県の大部分）南部に勢力をもった小田氏の居城跡です。小田城跡は、その歴史的重要性及び遺存度の特徴から昭和10年6月7日に約21.5haが国の史跡指定を受けました。

つくば市では、まちづくりの一環として小田城跡を保存整備する事業を地元とともに進めています。平成8年度から史跡南半分（市街化調整区域）の土地の公有化に着手し、翌9年度から史跡の内容を確認する部分的な調査（確認調査）を、同16年度から整備対象とした本丸跡とその周辺の曲輪跡で面的な本発掘調査を行いました。それらの成果を基に、同21年度から整備工事を行い、中世の小田城を体感できる歴史ひろばとして整備する計画です。

整備イメージ図

平成22年2月
つくば市教育委員会



小田城周辺の石造物

小田城跡北東の山裾には、三村山極楽寺遺跡群があります。そのうち、三村山清冷院極楽寺跡は、建長4年（1252）から10年間、奈良西大寺僧忍性が止住し、関東での律宗布教の足がかりとした寺院の跡です。

周辺には極楽寺の存在を物語る鎌倉時代の不殺生界碑や地蔵菩薩立像、石造灯籠、宝篋印塔、五輪塔、といった石造物が多く見られます。地蔵菩薩立像や石塔類は西大寺系石工の関与が推定される優品です。極楽寺の終焉時期は不明ですが、室町時代以降も、筑波山山麓では大型五輪塔を始めとした多数の石造物が造られます。こうした仏教美術の広がり、極楽寺が強い影響を与えていると考えられます。

また、この山裾一帯は自然の宝庫でもあります。宝篋山へ登るルートも整備され、文化財と自然を楽しめる場所となっています。



①磨崖不動明王立像(市)
平安時代末期
像高約 1.7m

②三村山不殺生界碑
建長5年(1253)
石碑高約 1.5m

③石造灯籠(県)
鎌倉時代中期
総高約 2.4m

③石造宝篋印塔(県)
鎌倉時代中期
総高約 2.0m

⑤石造地蔵菩薩立像(県)
正応2年(1289)
像高約 1.6m

⑥石造五輪塔(市)
鎌倉時代後期
総高約 3.2m



1. 小田十字路
2. 小田
3. 小田城跡入口
4. 小田小学校
5. 小田中部

○交通

- ・つくばエクスプレス(TX)「つくば駅」下車, コミュニティバス, 小田城跡入口・小田小学校・小田中部バス停下車。
- ・JR常磐線「土浦駅」下車, 関東鉄道バス, 小田十字路・小田バス停下車。

○問い合わせ先

つくば市教育委員会 教育総務課文化財室
〒305-8555
茨城県つくば市苅間2530番地2
(研究学園D32街区2画地)
電話 029-883-1111



本丸の概要

(1) 本丸跡の遺構面

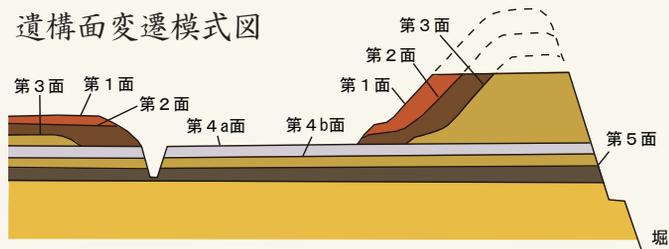
調査により、盛土整地など改修の様子から6面にまとめられる遺構面（当時の地面、ないしその残り）を確認しました。上層から第1面・第2面…としています。遺構面保護のため、第2面以下の調査はごく一部だけに留めています。およその年代は次の通りです。

第1面 (戦国時代末)	16世紀後葉
第2面 (戦国時代)	15世紀末～
第3面 (室町・戦国時代)	15世紀中葉～
第4面 (鎌倉・南北朝・室町時代)	14世紀～
第5面 (鎌倉時代)	13世紀～
第6面 (平安時代以前)	～12世紀



土塁跡断面

遺構面変遷模式図



(2) 中世遺構面の変遷

① 鎌倉時代 (第5面)

盛土整地が行われる以前の遺構面です。南土塁跡の下層から石列や石敷きが発見されました。また、本丸跡の西側にある曲輪Vでは、同じ頃のかかわらがまとまって出土しました。この時期、小田氏がすでに居館を構えていたかは不明ですが、一般的な集落とは異なる様相といえます。

② 鎌倉・南北朝・室町時代 (第4面)

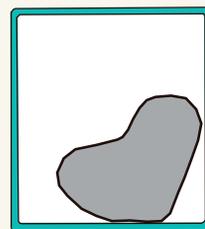
広く黄色土を盛って整地がなされます。上幅4m前後の堀が、南北約145m、東西約130mの範囲を方形に巡ります。曲輪内部は整地のみ部分と小石が敷かれた部分に大きく分けられ、石敷部の範囲は曲輪内の東から南にかけて、1/3程度と推測されます。このような堀が方形に囲み南に石が敷かれる形態は、以後の小田城本丸の原形となっています。本格的な土塁はなく、出入口は未確認です。防御性が重視されていないことから、「館」と呼ぶ方がふさわしいかもしれません。

③ 室町・戦国時代 (第3・2面)

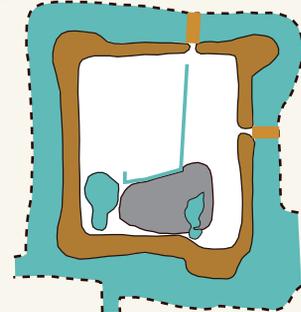
第3面には、基底幅6～10mの本格的な土塁が初めて造られ、土塁や堀により防御された「城」へと変化します。第2面以降も、土塁は内側へ、堀は外側へ拡幅されたほか、障子堀や曲輪隅の櫓台が造られるなど、さらに防御性が強化されていきます。虎口（城郭の出入口）は東・北の2カ所で、ともに木橋が架けられました。

第2面では、曲輪内部の北西に大規模な盛土整地がなされ、溝で区画されます。その内部は多くの建物が集中する区域となっています。この建物域では焼土や炭、焼けた壁土など、大きな火災の痕跡が顕著であり、小田城を舞台とした戦乱との関連が注目されます。南の石敷部は盛土により範囲が狭くなります。この時期までに、石敷部東西には有力氏族の城館でのみ確認されている園池が構築されます。本丸での建物域や園池の配置には絵画に描かれた足利将軍邸との共通性も認められ、名門小田氏の居城としての華やかさが強く感じられます。

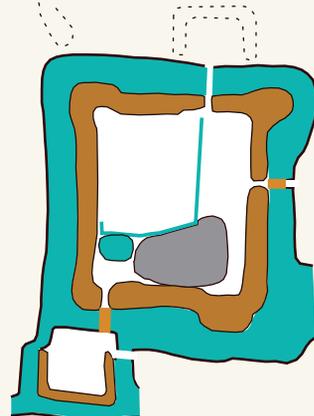
② 第4面



③ 第2面



④ 第1面



④戦国時代末（第1面）

小田城最後の時代の遺構面で、下層面に比べて多くのことがわかっています。第2面との大きな違いは東池を埋め、西池も縮小した一方で、南西虎口を新設し、その外側を防御する「馬出」を設置したことにあります。より戦闘に対応した変化と言えるでしょう。

堀・土塁 堀は幅約20～30m、深さ約4～5mの障子堀です。障子堀は、堀底に障壁（畝）を配したもので、敵を防ぐ工夫と考えられています。また、堀と土塁・櫓台の間には、幅1m前後の狭い平坦面（犬走り）が巡ることも確認できました。

土塁は基底幅が10～15mです。高さは不明ですが、南東櫓台の脇では約3m残っています。四隅は櫓台状に堀側へ張り出しますが、北西と南西は幅が狭く櫓台ではなかったようです。

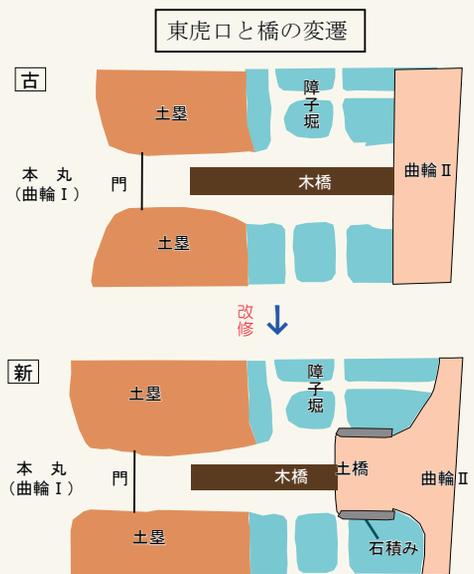
虎口・橋 南西虎口が新設され、虎口が3ヶ所となります。調査では、南西虎口で3.2m四方の規模になる門とその内側につながる石垣が、北虎口で小石を敷いた舗装が、東虎口で1辺50cmほどの大きな門の礎石が、それぞれ見つかっています。

新設された南西虎口には木橋が架けられました。北虎口の橋は木橋から土橋へと変わり、東虎口の橋は土橋状の張り出しと木橋を組み合わせたものとなります。北土橋や東木橋の張り出しでは裾に石積みがなされており、南西虎口の石垣とあわせて石の多用がこの時代の特徴といえそうです。

曲輪内部 土塁の内側には南北約115m、東西約100mの平坦面が広がります。北西部の建物域は大溝で南北約75m、東西約70mに区画され、大溝内側の東側には塀もしくは柵が、南側には土塁がありました。建物域は周囲より約30cm高くなっています。建物域の内部は、南側では溝による区画が大きく柱穴や礎石が集中しますが、北側では区画が小さく焼けた壁土や炭化米が散布し、状況が異なります。このことは、南が主殿などの大型建物が位置した表(非日常)の空間で、北が倉庫や台所などの裏(日常)の空間であると考えられます。南の石敷部では、東池は無くなり、西池は狭くなって残ります。また、通路は東虎口から側溝をもって建物域へ向かうものが確認されたほか、北虎口から大溝に沿って南へ行くものの存在も推測されます。

(3) 出土遺物

出土遺物のほとんどは土器で、13～16世紀頃のものが多く、陶磁器も見られます。陶磁器には座敷飾りなどに使用される盤(大皿)・壺などの高級品や、茶道具が多く含まれており、優雅な暮らしぶりを窺うことができます。また、使い捨てのさかつきとして使われた土器の小皿(かわらけ)が大量に出土していることも、多くの客人や家臣が集まって儀式や宴会が行なわれたことを示しており、やはり家格の高さを反映しています。戦乱を物語る遺物として、鉄鏃や鉄砲玉、多量の焼けた壁土も注目できます。そのほか、瓦、硯、石臼、石塔、漆器椀、銭貨などの豊富な出土遺物は、当時の生活や文化を知る大きな手がかりとなります。



輸入陶磁器 主に中国からの輸入品



国産陶器 瀬戸・美濃・常滑などで焼かれたもの



土器 常陸国で焼かれたもの



木製品・石製品・金属製品など

① 建物跡



写真左側に見える石は、建物の柱を支えていた礎石です。他に礎石は残ってはいませんが、列状に並ぶ穴の位置にも据えてあったと考えられ、ここに礎石建物跡があったと推測されます。建物域の南側では、もう1棟礎石建物跡が確認されており、この区域に礎石を据えるほどの立派な建物群があったと想定されます

② 西池跡

当初は南側の土塁付近まで広がっていましたが、改修によって北へ狭まるとともに、深く掘り直されました。改修後の規模は、南北約14m、東西約17m、深さ約1mで、斜面には石が敷いてありました。写真の石は崩れていますが、本来は池の周りを飾る景石だったと考えられます。景石が少ない東池とは、様子が大きく異なります。



③ 南西虎口跡

石列と礎石を持つ門があり、虎口両脇の土塁裾部から本丸内側へ低い石垣を築いていました。写真中央の石は、石塔の部材です。また、南西馬出との間には、木橋が架けられていました。



④ 南西馬出跡

南西虎口を守る約50m四方の馬出曲輪です。幅約10mの堀で囲われていますが、北西の堀は鉤の手状に屈曲して本丸の堀へとつながります。北東には、東隣の曲輪へ渡る土橋が、盛土で構築されています。



発掘調査の成果

小田城では、戦乱が激しさを増すにつれて、様々な防御の工がなされていきます。その変遷をたどることは、日本の城がどのように変化するのかを考える上で重要です。

一方、本丸での足利将軍邸とも共通する建物群や園池の配置、豪華な出土遺物は、大名特有の生活や文化を物語っています。東の伝統的な名家として「八屋形」（千葉、小山、佐竹、結城、宇都宮、長沼、那須）に数えられた小田氏の高い家格を象徴しています。



⑤北虎口跡

北虎口跡には2時期の変遷があり、最終期の虎口は幅約4mで、通路は小石等で舗装されていました。橋は障子堀や木橋の橋脚を埋めて構築した土橋で、裾部分には石積みが施されていました。一時期前の虎口跡は、最終期よりも西へずれた位置にあり、埋められた木橋と対応するものと考えられます。



⑥暗渠跡



本丸中央南寄りの地点には、大溝へ続く石組みの暗渠跡があり、この上には通路が通っていたと考えられます。

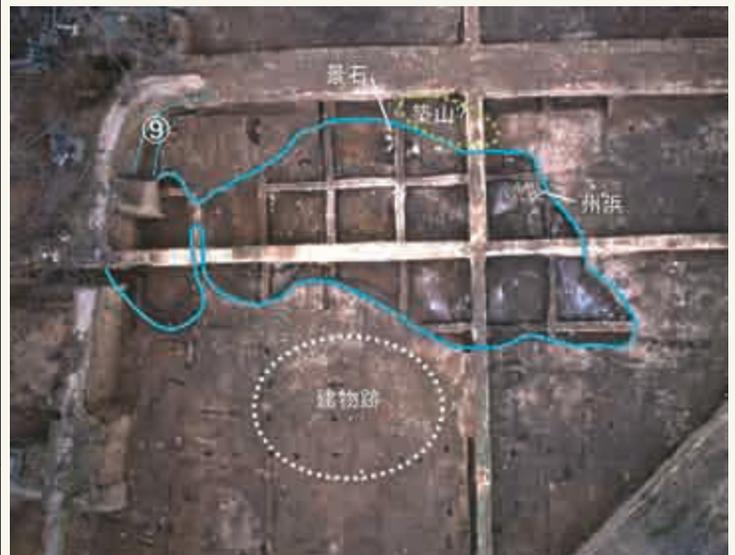


⑦東虎口跡



東虎口跡は3時期の変遷があり、改修毎に位置を南へ移動させています。複数の橋脚跡が確認され、障子堀の障壁が木橋部分を避けて構築されていたことから、長く使用されたと推測されます。最終期の虎口幅は約4mで、そこから両側に側溝がある幅6mの通路が建物域へと伸びています。

⑧東池跡



東池跡は、南北32m、東西13mの不整形で、深さ30~80cm。池底には石が敷かれていますが、斜面は西側の一部を除き石を使用していません。池跡は多量の炭化米層や黄褐色土層で一気に意図的に埋められており、出土品の年代から第1面の頃には機能していなかったと推測されます。

⑨遺物出土状況

本丸跡からは、13~16世紀の土器が多く出土しています。特にかわらけが多量で、本丸で酒宴や儀式が行われていたことが窺えます。写真は、東池へ続く溝跡での出土状況です。





小田城周辺の歴史的景観

現在残る小田城跡は、鎌倉時代以来何度も作り替えられ、廃城後に土塁を崩して堀を埋めるなどの改変が行われています。現在残る戦国時代末期の遺構は、方形の曲輪Ⅰ（本丸）を中心にほぼ三重の堀と大小の曲輪が取り囲む構造で、史跡指定範囲でも東西 500m、南北 600m以上の規模があります。

古絵図などには外側の町場を囲むような堀も描かれています。また小田城跡北側の山上には、堀跡や土塁跡など城郭の遺構が残る前山城跡があります。小田城の最終段階には、この前山城と長大な堀で囲む全長 3 km 以上にも及ぶ外郭があったとの説もあります。

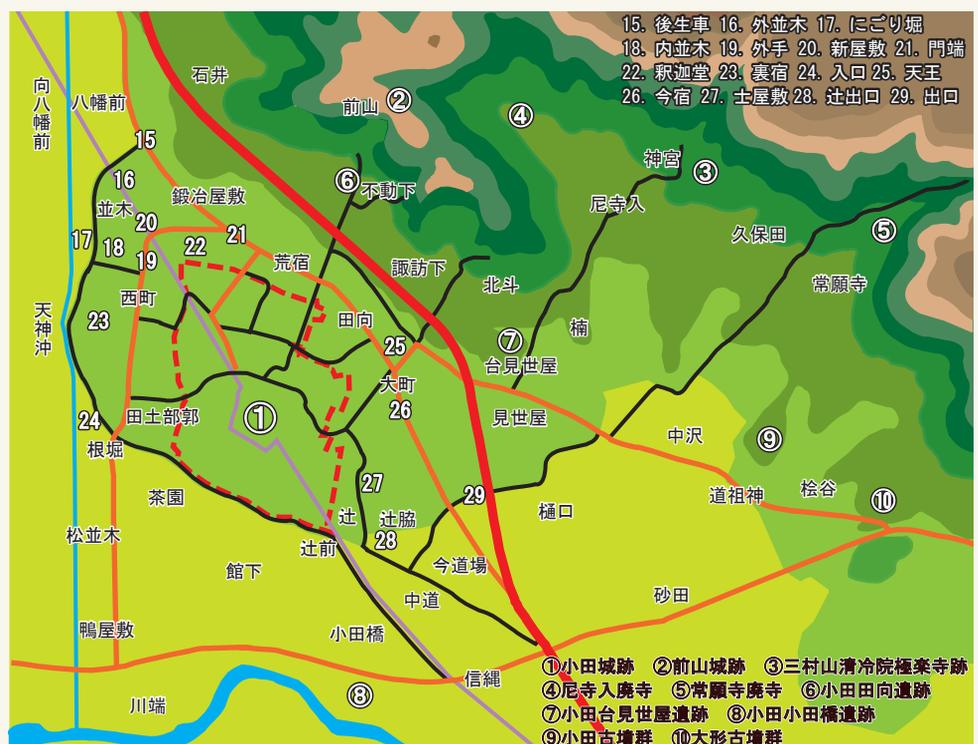
小田城跡周辺には小字や通称などの地名に中世の名残りをとどめたものが多くあります。城内の曲輪には、「南館」、「丹後屋敷」、「新左工門屋敷」、「太郎右工門屋敷」、「信田郭」、「田土部郭」などの屋敷に
関係した地名があり、有力武士の屋敷などがあったのでしょ

う。その外側には、町場に関する地名として「西町」、「荒宿」、「大町」、「今宿」、「見世屋」、「台見世屋」などがあります。また、宝篋山山頂に所在する天文 8 年（1539）の板碑銘では「下宿」の存在も確認できます。

前山城跡がある北の山裾には神仏に関わる「不動下」、「諏訪下」、「北斗」などが、さらに北東の山裾には三村山極楽寺に関わる「神宮」、「尼寺入」、「常願寺」などが、地名として残っています。この付近の山麓には五輪塔などの石造物が多数存在しており、瓦も大量に出土していることから、宗教に関連する場であったと推測されます。このように、小田一帯では遺称地名から小田城を中心とした中世の景観が復元できます。



小田城跡の現況



小田城跡周辺の地名と遺跡